

第1回下北沢国際人形劇祭2024

# DAILY JOURNAL

DAY 8

Wednesday,  
February 28,  
2024



こんな演劇ってありなの!? 絶対ワインの中身は入ってないだろう。それを観客の方に投げることはないだろう。まさか観客席の間を通ることはないだろう。観客の髪型を勝手にぐちゃぐちゃにはしないだろう。私(観客)は舞台の上でなんでお酒を持って踊っているのだろう。全ての期待にいい意味で裏切られ続ける展開。次はもう驚かないぞ、なんて意地を張ってみても結局驚き続ける自分がある。プログラムの説明に書いてあった「一瞬ノードあり」にもいい意味で裏切られた。でも、なぜだかこの裏切りが心地よく感じられるようになってくる。また、誰が表現において超えてはいけぬ線なんて決めたのか、作品創りにルールなんてあるはずがないことに改めて気付かされた。

二人の道化が本当に怯えているものは一体何だろう。彼らは演出家であるポコに勝手に身体を操られることもある。それはまるで糸で操られる人形のような。また、時にはポコの目を盗んで自分たちのしたいことを始める。しかし、それすらも台本に書いてあることであり、自分たちの「次」の行動に迷い始める。自分の行動を自分の意思で決めることのできていない状況は、現実を生きる私たちにもあり得ることだと感じた。コメディの要素が多く、笑わせてくれる場面が多いからこそ、その裏にあるメッセージ性も捉えられた。

また彼らの想像を超える行動には時々リア

ルな面も含まれていた。他人と乗る狭いエレベーターの中での気まずい空気感。アダムから流れる血。ショーというあり得ないことが連続する演目の中に、リアルな部分が垣間見えるのが興味深かった。リアルさを感じられる部分があるからこそただのコメディで終わらず、私たちの想像力や解釈を促す作品になっていると感じた。  
辻桜衣 (デイリージャーナル編集部)

After I watched a truly funny comedy show, I don't know why, but I often forgot the reason I was laughing such a lot. "Coulrophobia" was one of this kind of shows for me. The last scene made me lose all of my memories about the show. I'm in trouble with it as a writer of this drama. At the beginning of this show, I have a faint memory that the host said "Be careful to be completely absorbed in the show!" or something. Maybe I fell into this trap. SIPF is the first time for me to see the puppet show in a theater. I have watched the opening show Dog's Life and The Table. Each one destroyed my imagination for puppetry by their own way, like the richness of expression of puppeteers and communication between puppeteers and puppets made me fall in love with puppetry. "Coulrophobia" brought more scope to the perspective of avant-garde puppetry that

was beginning to take shape within me. This work looked more metafictional. They try to break down the framework of thought that is caught up in the binary elements, like human and puppet, real and fiction and control and under control, that puppetry contains. In this show, the main actors are humans (Dik and Adam) as the role of clown dolls in the cardboard world. And the boss who controls them is "Poco". But in real who manipulates him are Dik and Adam. While pretending to be trapped in a fictional world, they involve the audience watching in the real world and expose them on the stage, also jumping into the audience seats. Despite, they are obedient to the boss and follow the script. Just as what Adam thought was funny, Dik found it terrifying (I remember a scene of turning a music box), they have difference how they draw a border between reality and fiction (like the wall of the dressing room that Dik sees but Adam doesn't see). I feel them quite human and endearing from that point. The borders of any binary elements, like real and unreal, human and puppet, were kept messed up. In that chaos, we couldn't see even two "dickies" swinging vigorously were real or not.  
Mitsuyoshi Kawasaki (デイリージャーナル編集部)

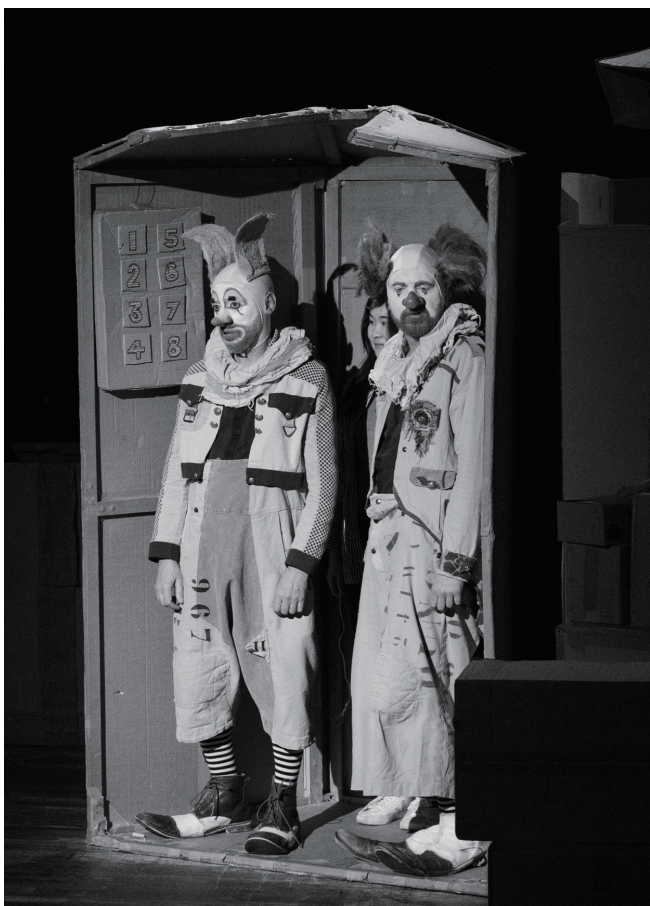
# 道化恐怖症

## Opposable Thumb Theatre



### あらすじ

舞台は段ボールでできた架空の世界。二人の道化が自分たちの仕事で、人々を楽しませる一方で、そのシステムに縛られ、上位の邪悪な人形「ポコ」によって行動が予め定められているというジレンマに直面している。彼らはその状況から脱出したり、仕事から解放される方法を模索したりする



が、「ポコ」によって操られるという奇妙で滑稽な展開が続いている。パフォーマンスは驚くほどテクニカルで、人形の相互作用が見事に可視化されている。人形を操りながら人形に操られることで、道化に関する偏見や印象を打破し、赤い鼻の裏に潜む複雑な現実を表している。また、観客との交流も豊富で、ステージに多くの人をそのユーモアと予測不可能な世界に引き込み、二人の道化の奇想天外な冒険に同行させことで、笑いと深い洞察を同時に味わえる。

### 劇評

赤い鼻、大きな靴、捧腹絶倒の中で極端な恐怖が宿り、操られた二人の道化から現実のすべての人まで広がっていく。

『道化恐怖症』の冒頭、道化の笑いと恐怖を同時に表している。彼らは不器用な演技で観客を楽しませ、紙製のバイオリン、チューバ、アコーディオンを囲んで一行は楽しそうに踊っている一方で、オルゴールのハンドルを引くと、下から一筋の光を放ち、不気味な音楽が流れ、それまでユーモラスだった道化のアダムは一瞬にして凶悪な顔に変わる。極端に達するたびに、謎めいた声が現れる。極端の裏

に、二人の道化は、見えない力によって操作され、既定の台本に従って行動する。アダムがディックにロープで操られるのに抵抗する時、その神秘的な力は可視化される。ディックの意志がコントロールされ、子供のような恐ろしい人形のポコがディックの操りによって登場する。人形を操りながら操られるシーンを見て、私たちは誰を操っているのか、そして誰に操られているのか、操られる運命から逃れられないのかという疑問に陥る。

さらに進んで、アダムは荒々しく、狂乱し、羊の人形の「メエメエ」が怖いと非難する。対してディックは、人形が生命のないもので、生きてるように動くために、「お前は人形が怖いのだ」と鋭く言い返す。「メエメエ」とアダムは操られる存在という意味で同類だが、アダムは人形への恐怖を避けられない。アダムにとってすらそうなのだから、まして人間においてはなおさらである。道化は無秩序なものだが、だからといって「一線」を超えて、極端な恐怖、不機嫌や喜びなどを見せてはならない。人間も同じだ。誰でも「内なる人形」を持っている。人形の道化から人間の道化まで、立場を入れ替えて考えるなら、人形に対する固有の偏見や印象を打ち碎かれるのではないだろうか。

彼らは段ボールの世界に囚われた道化たち。二人は「内なる人形」を取り出し、段ボール箱の上で開かれた長方形の穴の中で片手で演技し、最初の出会いやバンドなどのシーンを繰り返す。最終的に邪悪のポコに首を折られる。二人はどこでも逃げられないことを暗示する。アダムは楽屋の壁、ディックが観客から見えないと思っている壁を反抗的に突き破る。「壁はないんだよ！」って。アダムはダンボール箱の世界から脱出することはできなかったが、観客の世界、「第四の壁」を破る。その結果、観客全員がパフォーマーになり、アダムを乗せた船で冒険する海に変身する。時には静かであり、時には嵐が激しく、失望と希望、束縛と自由の間を行き交っている。アダムの試みは失敗に終わったが、無意味ではない。どうすればこの段ボールの世界から抜け出せるのか。答えは、二人の観客を殺し、自分の代わりに、既定の台本を演じる人形になってもらうことだ。観客の叫び声の中で、二人の観客は道化の服を着替え、紙箱の世界に囚われた道化師になる。全てが終わった時、謎の声が再び響き、二人の道化は裸になって再び無我夢中で踊る。彼らはその特定の空間から逃れ、人形としての自分から逃れ、外部のものを取り去り、最終的に原点に戻ってしまった。今日は下北沢国際人形劇祭の最後の公演で、道化たちは二回のカーテンコールをして退場したが、観客たちは長い間拍手を送り、うっとり立ち去ろうとしなかった。まだ何かを期待していたからだろう。戎之靖（デイリージャーナル編集部）

これまでの人生で俳優に靴下をむしり取られたことがあるだろうか？ アダムとディックは劇場空間を物理的にも演劇的にも縦横無尽に暴れ回る。観客を運命の相手として舞台に連れ出したかと思えば、今度は自分達が客席に乗り出し観客の体でロッククライミングに興じる。ディズニーランドで体験できるようなハチャメチャ風味のサービスではない、本場のハチャメチャだ。観客とパフォーマーの境界も、フィクションとメタフィクションの境界も常に揺れ続ける。しかしいくらそれを揺るがしても、2人がこの段ボール世界を脱出することはできない。

中盤、2人をこの世界に捉えている道化人形のポコがその姿を表すと、作品の姿はさらに捻れていく。ポコは2人を支配するキャラクターであるにも関わらず、彼らが操作しなければ存在しえないのだ。声だけの登場の段階では2人のいる世界の外側、はるか上空にいるかのようなポコが、他ならぬ彼ら自身の「内なる人形」に見えてくる。外部と内面というイメージがぐるとつながり循環した瞬間、この作品が「内から外への脱出」というオハナシではなく、自分が決して離れることのできないもの=世界そのものへの果てしない挑戦として立ち現れた。

そしてこうした挑戦、あるいは挑戦への夢はきっと、私たちの日々の悪戦苦闘の全ての源泉だ。道化のパフォーマンスを今まで見たことがなかったが、確かにリア王の道化が言った通り「私はあんたの影帽子」なのだ。と思った。

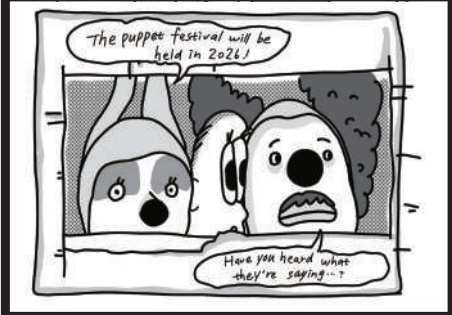
魚田まさや (デイリージャーナル編集部)



# MANGA

SONG YUE @eozislet

Opposable Thumb Thumb Theatre



# SIPF MEMORIES... SEE YOU IN 2026!



今日の  
デイリージャーナル編集部

文：  
戎之靖  
魚田まさや  
川崎光克  
辻桜衣

絵：  
風車  
赤羽悠那

写真：  
間部百合